17　柳田国男の山人論と蝦夷の考古学

東海大学文学部歴史学科考古学専攻　松本建速

Ⅰ．概要

日本列島北部域の考古学・古代史の重要な話題の一つに、蝦夷と書いてエミシと呼ばれ、古代日本国成立期に国の外にいたとされる人々に関する論、すなわち蝦夷論がある。列島の先住民が誰で、後にどうなったかという「問い」と密接に関わり、研究者のみならず一般の人々も興味を持つ主題でもあり、パブリック・アーケオロジーの視点からも重要である。そして最近の研究で、日本民俗学の父柳田国男の山人論が1930年代までの初期蝦夷論の基盤にあることが明らかになってきた（小熊1995、設楽2017）。

石器時代人（縄文人）＝日本列島の先住民＝蝦夷＝山人という考えはミネルヴァ論争で有名な喜田貞吉の蝦夷論（喜田1937など）の基盤であり、東北北部では縄文土器の実年代についてのその説は否定されているが、1990～2000年代に蝦夷の考古学をリードした工藤雅樹の説でも、縄文人は古代蝦夷の祖先であり、その末裔が北東北の人々だと述べており（工藤1994）、喜田説・柳田山人論のの枠組みは生きている。民俗学者であり「東北学」の提唱者でもある赤坂憲雄は、その工藤の説を引用しつつ、「蝦夷の考古学」の深化による山人論研究の進展を期待すると一般書で語りかけ、書籍は版を重ねている（赤坂2000）。

今回、柳田の山人論と蝦夷論との関係を整理し、蝦夷の考古学をさらに進め、縄文人➡古代蝦夷➡アイヌ/現代の北東北の人々に分かれたとする考えが成り立たないことを説明する。

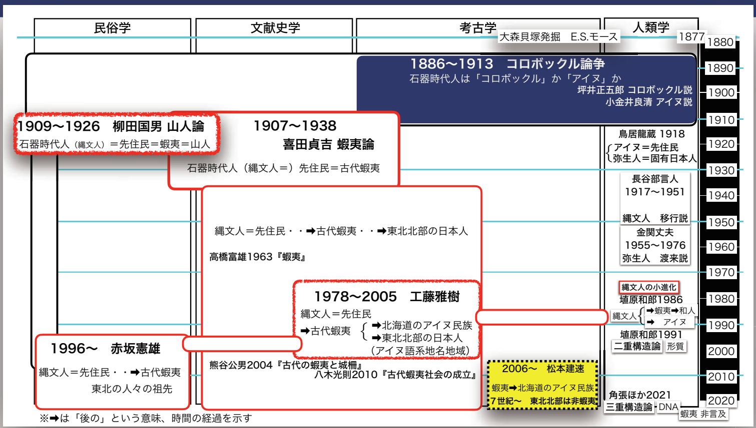

図１　柳田国男の山人論と蝦夷の考古学の関係

表１　胆沢地域の集落遺跡　３～８世紀

地域	細分	No.	遺跡名	焼失住居数/全住居数　その他
胆沢川流域	北岸	1	上餅田（旧金ケ崎町）	
		2	石田（旧金ケ崎町）	0/3棟 8後
		3	西根（旧金ケ崎町）	
		4	鳥海柵（旧金ケ崎町）	
	南岸	5	膳性（旧水沢市）	
		6	今泉（旧水沢市）	
		7	玉貫（旧水沢市）	
水沢段丘周辺	北高位面	8	中半入（旧水沢市）	※1
		9	高山（旧水沢市）	
		10	西大畑（旧水沢市）	
	低位面	11	石田Ⅰ・Ⅱ（旧胆沢町）	1/16棟 8前　2/12棟 8後
		12	沢田（旧胆沢町）	0/1棟 8後
		13	要害（旧胆沢町）	1/1棟 8後
		14	漆町（旧胆沢町）	0/2棟 8後
		15	二本木（旧胆沢町）	
		16	清水下（旧胆沢町）	
	南高位面	17	作屋敷（旧胆沢町）	0/3棟 8後
		18	堤（旧胆沢町）	0/5棟 8後
		19	西光田Ⅰ（旧水沢市）	
		20	石田Ⅱ（旧水沢市）	4/13棟 8後　0/4棟 8末～9初
		21	石田（旧水沢市）	1/16棟 8前 2/12棟 8後 0/5棟 9前
		22	後田・要害（旧水沢市）	
		23	小十文字（旧胆沢町）	
北上川流域	西岸	24	東大畑（旧水沢市）	0/20棟 8後　0/10棟 9世紀
		25	大曽根（旧水沢市）	0/1棟 8後
		26	竈堂（旧水沢市）	0/1棟 8後
		27	東館Ⅱ（旧水沢市）	0/5棟 8後　0/2棟 9前
		28	権現堂（旧水沢市）	
		29	伯済寺（旧水沢市）	
		30	跡呂井（旧水沢市）	
		31	常盤小学校（旧水沢市）	
		32	杉の堂（旧水沢市）	10/29棟 8後
		33	熊之堂（旧水沢市）	4/8棟 8後～9初
		34	大学Ⅰ（旧水沢市）	
	東岸	35	三百刈田（旧江刺市）	
		36	愛宕梁川（旧江刺市）	土坑墓
		37	後中野（旧江刺市）	
		38	落合Ⅲ（旧江刺市）	0/1棟 8後　0/5棟 9前
		39	兎Ⅱ（旧江刺市）	0/2棟 8後　0/2棟 9前
		40	力石Ⅱ・Ⅲ（旧江刺市）	0/1棟 8後　0/10棟 9前

西暦	3 前半	3 後半	4 前半	4 後半	5 前半	5 後半	6 前半	6 後半	7 前半	7 後半	8 前半	8 後半	9 前半	9 後半
時期別集落数合計	0	0	0	3	2	3	4	3	5	7	12	30	※2	※2

※1：後北C_2・D式土器片、北大Ⅰ式土器片出土　※2：第　図に示すように胆沢地域の9～10世紀の集落は数多い　■集落存続期間　■焼失住居有り集落

表２　８世紀に記された土蜘蛛と国栖

文献名	地域名	天皇名称等	土蜘蛛表記	国栖	住処
古事記	忍坂大室	神武天皇	土雲（具毛）		
常陸国風土記	茨城の郡	むかし	都知久母	国巣	土室（むろ）
常陸国風土記		崇神天皇		国栖	穴
常陸国風土記	藝都の里	倭武天皇		国栖	
常陸国風土記	薩都の里	崇神天皇	土雲（国栖の個人名）	国栖	
豊後国風土記	石井の郷	むかし	土蜘蛛		
豊後国風土記	五馬山	むかし	土蜘蛛		
豊後国風土記	禰疑野	景行天皇	土蜘蛛		
豊後国風土記	くえ石野	景行天皇	土蜘蛛		
豊後国風土記	宮處野	景行天皇	土蜘蛛		
豊後国風土記	大野の郡	景行天皇	土蜘蛛（2箇所）		岩屋
豊後国風土記	網磯野	景行天皇	土蜘蛛（2箇所）		
豊後国風土記	速見の郡	景行天皇	土蜘蛛		
豊後国風土記	禰疑野	景行天皇	土蜘蛛		岩屋
肥前国風土記	国益城の郡	崇神天皇	土蜘蛛		
肥前国風土記	八代の郡	崇神天皇			
肥前国風土記	佐嘉の郡	日本武尊	土蜘蛛		
肥前国風土記	小城の郡	日本武尊	土蜘蛛		
肥前国風土記	賀周の里	景行天皇	土蜘蛛		
肥前国風土記	大家嶋	景行天皇	土蜘蛛		
肥前国風土記	小近嶋	景行天皇	土蜘蛛		
肥前国風土記	大近嶋	景行天皇	土蜘蛛		
肥前国風土記	能美の郷	景行天皇	土蜘蛛		
肥前国風土記	彼杵郡	景行天皇	土蜘蛛		
肥前国風土記	浮穴の郷	景行天皇	土蜘蛛		
肥前国風土記	周賀の郷	むかし	土蜘蛛		
日本書紀	吉野	神武天皇		国栖の祖先	
日本書紀	大和国	神武天皇	土蜘蛛		
日本書紀	高尾張国	神武天皇	土蜘蛛		
日本書紀	磒田国	神武天皇	土蜘蛛（5箇所）		岩屋や岩室

2．柳田国男の山人論と蝦夷の考古学

・1886（明19）～1913（大２）　コロボックル論争

日本で近代考古学が始まったころ、人類学者を中心に研究者第１世代が熱心に議論

縄文土器を使う段階の石器時代人が先住民　当時の基礎的な見方

日本列島の先住民：コロボックルかアイヌ民族か

・柳田国男の活動

1901（明34）～1908（明41）　東日本で考古学資料を採集　農商務省勤務農務局勤務

1906（明39）　サハリン出張　「コロボックル」の遺跡＋アイヌの生活見学

1909（明42）３月「天狗の話」『珍世界』「アイヌ語地名」　先住民の子孫の現存を推測

５月　日本山岳会で講演　「山民の生活」　日本の先住民はコロボックルかアイヌかという問いを紹介　日本列島の先住民に興味を持っていた

８月　遠野訪問

1910（明43）３月「怪談の研究」『中学世界』神隠しと山男（異人種）　山奥に現存か？

４月「山人の研究」『新潮』「山人」初出　異民族　土蜘蛛・蝦夷・国栖など

６月『遠野物語』出版

「此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治42（1909）年の２月頃より始めて夜分折々訪ね来たり此話をせられしを筆記せしなり。（中略）国内の山村にして遠野より更に物深き所には又無数の山神山人の伝説あるべし、願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ。」1頁　『遠野物語』聚精堂 1910年

11月「アイヌの家」『人類学雑誌』（1912年まで複数を投稿　山人論以外）

12月　郷土研究会創立　新渡戸稲造、小田島省三など参加

1913（大2）　郷土研究会機関誌『郷土研究』創刊　久米長目の名で「山人外伝資料」発表

1917（大6）２月「山人外伝史料」『郷土研究』　山人の歴史を書くことは不可能

11月「山人に就きて」講演　日本歴史地理学会　先住民山人はすでに絶滅

1926（大15）　『山の人生』　山人についての最後の文章　「山人考」掲載

・浜田耕作と喜田貞吉の南九州の古代民族論争　南九州の古墳時代の人々を巡る論争

1916（大5）～1921（大10）　異民族（喜田説）か日本人（浜田説）か

1913（大2）　喜田が柳田の「山人外伝資料」を高く評価

➡日本歴史地理学会での講演を喜田が依頼（1917年に実現）

1916（大5）　６月　喜田貞吉「蝦夷の順服と奥羽の拓殖」『奥羽沿革史論』喜田の蝦夷研究が本格的に始まる　柳田が山人論を語らなくなった後、喜田が盛んに論ずるようになる

1936（昭11）　ミネルヴァ論争　喜田貞吉vs山内清男　常識考古学vs科学考古学

～1938（昭13）　喜田貞吉　日本歴史地理学会、各種書籍　縄文人＝先住民＝古代蝦夷

喜田説の基盤は柳田「山人論」（石器時代人＝先住民＝蝦夷＝山人）

工藤雅樹（1994）「考古学から見た古代蝦夷」『日本考古学』創刊号　通説的位置

北東北の縄文人（先住民）・・・➡古代蝦夷・・・➡アイヌ民族/日本民族

1996（平8）～　民俗学者・東北学の赤坂憲雄　山人論継承　工藤説「蝦夷の考古学」に期待

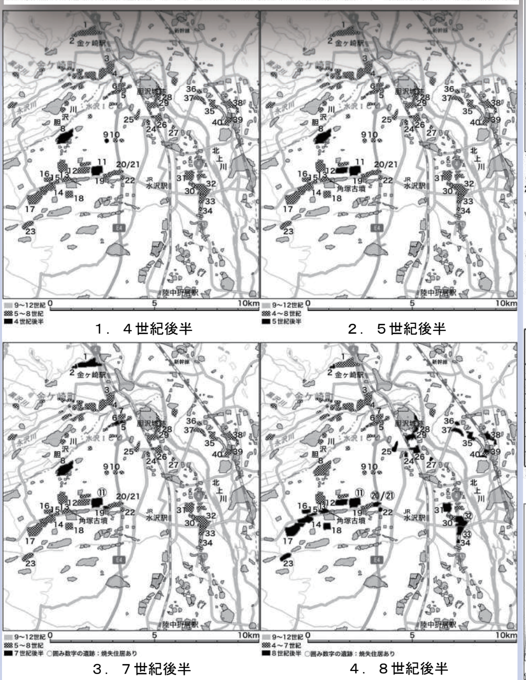

図２　胆沢地域の４～８世紀の集落遺跡

※岩手県教育委員会（2022）「いわて遺跡地図」の「古代の遺跡」を表示し、岩手県作成の「いわてデジタルマップ」（sonicerb-asp.jp）中の「遺跡地図」記載の詳細情報と発掘調査報告書を参考に作成

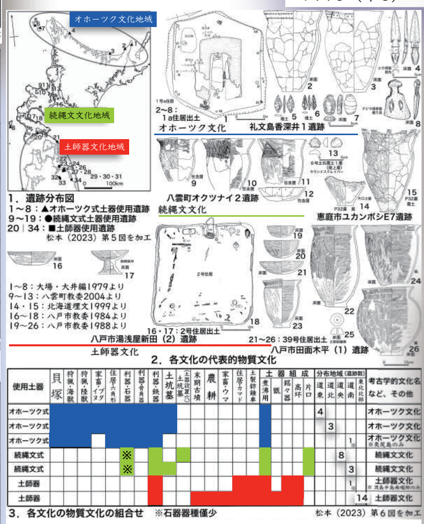

図３　北海道・東北北部の７世紀中葉の諸文化

3．柳田山人論・喜田蝦夷論の研究法

・史料批判が不十分であった山人論・喜田蝦夷論

古代の文献を史料批判せずに歴史叙述に使うことは不可能

・柳田国男の山人論の研究法

当初は資料を収集・報告、学会での徹底的な批判を念頭におく

資料・史料：口承伝承や民俗・文献（表２）➡歴史叙述には史料批判が必要

方法：①資料を採集　②文献を読む　➡柳田は史料批判をせず

➡『遠野物語』他　文学として一般に流布　➡表２の文献は「物語」

・1930年代　柳田山人論を基盤とした喜田蝦夷論が学会・一般の主流

4．考古学による史料批判　アテルイの戦はあったか？

・従来の手法（文献史学・考古学）：『続日本紀』の記載を基盤とする（図２）

戦闘の記載：一方の記載だけを使う歴史叙述➡不可　史料批判必要

・史料がない　➡考古学で史料批判が可能

・胆沢地域の集落遺跡　➡縄文時代以来継続する遺跡は無い（表１・図３・４）

・８世紀後葉（戦闘の時期）「14ヶ村800戸を焼く」➡痕跡無し（表１・図５）

・４世紀後半以降の古墳文化の人々（日本語話者）の移住（表１・図３・４）

・断続的に南側から移住　４世紀後半・５世紀後半・７世紀・８世紀後半

・８世紀後葉　「アテルイらと日本国軍との戦い」➡痕跡無し

・遺跡から読む事実　➡集落の急増　➡多数の移住者と開拓（表１・図３）

図４　杉の堂遺跡の住居跡の配置状況

5．　まとめと今後の展望

『遠野物語』を書いた1910年頃の柳田は、東北地方の山深くには山人が現存しており、その人々は縄文時代以来の先住民すなわち土蜘蛛や蝦夷の末裔だと考えていた。それを基盤とした蝦夷論を展開したのが喜田貞吉であった。喜田の説は今では大部分が誤りとされるが、北東北の縄文人が古代の蝦夷となり、当地の日本民族となったという工藤雅樹説は今も通説の位置にある。

しかし考古学で史料批判した結果、古墳文化の担い手（日本語話者）の断続的な移住があり、北東北の人々は当該地域の縄文時代以来の人々すなわち先住民である古代蝦夷の末裔ではなく、古墳文化の系統の人々だと認識できる。今後、論文を完成させる予定である。

謝辞：文献調査で奥州市埋蔵文化財センターのご協力を得ました。感謝申し上げます。

参考文献

赤坂憲雄　2000『東西/南北考』岩波新書
小熊英二　1995『単一民族神話の起源－<日本人>の自画像の系譜』新曜社
喜田貞吉　1937「蝦夷およびアイヌと縄文式石器時代人」『文化』４巻11号　東北大学文学会
工藤雅樹　1994「考古学から見た古代蝦夷」『日本考古学』創刊号　日本考古学協会
設楽博己　2017「柳田国男の山人論と考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』202集
柳田国男　1910『遠野物語』聚精堂